

旺文社文庫

戦争と平和（下）

—縮訳版—

トルストイ著
小沼文彦訳



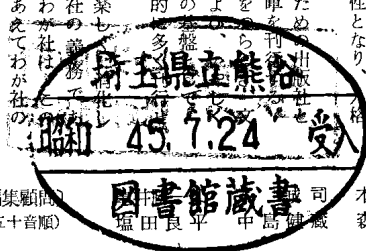
「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであらう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をわたり、学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、若し知識人たらしんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く集めんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ安く、やすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

赤尾好夫



〔編集顧問〕
(五十音順)

中央図書館蔵書
塩田良平 中島健藏

木村毅
森戸辰男

旺文社文庫 戦争と平和(下) 240 円

—— 縮訳版 全2巻 ——



昭和42年 6月1日 初版印刷
昭和42年 6月10日 初版発行
訳者 小沼文彦
発行者 鳥居正博
印刷所 中央精版印刷株式会社

発行所 株式会社 旺文社
東京都新宿区横寺町
電話 (269)-2111 (大代表)

(中村印刷・穴口製本)

(許可なしに転載、複製することを禁じます) 4N131-10-11,1 © 小沼文彦 1967

落丁・乱丁・不良本はお取り替えます
書店または本社に直接お申し出ください

旺文社文庫

戦争と平和(下)

—縮訳版—

原典はきわめて大部のため、この訳では、原作の意
図をまげない範囲で削減し、読者の便をはかった。

目次

まえがき
主要登場人物

第三編

第一部
第二部
第三部

第四編

第一部
第二部
第三部
第四部

(上巻)

五

七

九

五

一六

一八三

一八五

二四五

二七八

三二四

エピソード

第一部

三四三

三四五

第二部

三七八

解説

小沼文彦

トルストイの人と文学

(上巻)

作品解説

(上巻)

作品鑑賞

四〇一

人間の無限のおもしろさ

本多秋五

四〇八

代表作品解題

四二一

参考文献

四三〇

年譜

四三二

あとがき

四三〇

挿絵

V・A・セーロフ

主要登場人物

アンドレイ・ボルコンスキーク公爵 ロシヤの名門貴族の家に生まれた青年将校。あらゆる面ですばらしい資質に恵まれている。

リーザ ペテルブルクで最も魅力的な婦人と定評のあるアンドレイの妻。

マリーヤ アンドレイの妹。従順で宗教心の強い令嬢。

ニコライ老公爵 アンドレイの父。いまは引退して地方住まいをする旧時代の将軍。

ブリエンヌ 令嬢マリーヤの小間使。典型的なフランス娘。

ワシーリイ・クラウギン公爵 権謀術数をとことする政界の有力者。ピエールの義理の父。

エレン その長女でピエールの妻。美人ではあるが、無知で淫蕩的な女性。

IPPOLITO その長男。おとなしいだけが取柄の、あまり利口でない外交官。

アナトリー その次男。姉に似て美しいが、品行不良の青年。

ピエール・ベズーホフ 前時代の高官ベズーホフ伯爵の私生児。のちに伯爵家をついで大富豪になったが、思索を好み実行力に欠けた青年。

イリヤ・ロストフ伯爵 好人物の中流貴族。この伯爵夫妻はトルストイの祖父母をモデルにしたものといわれる。

ヴェーラ その長女。モデルはトルストイの義理の姉。

ニコライ・ロストフ その長男。単純ではあるが実行力にも恵まれた青年。モデルはトルストイの父。

ナターシャ その次女。健康で活動的な美しい令嬢。トルストイの義妹がモデル。

ペーチャ その次男。

ソーニャ 幼いときからロストフ家で育てられた少女。モデルはトルストイの伯母の少女時代で、彼女とニコライの關係は、トルストイの父とこの伯母の關係をそっくり借用したものだといわれる。

ボリス・ドルベツコイ 公爵。ドルベツカーヤ夫人のむすこで、ロストフ家の親戚。世俗的で如才なく立ちまわる青年將校。

アンナ・パヴロヴナ・シェーレル 皇太后づきの女官で、政界にも勢力をもつ社交界の中心人物。

クトゥーゾフ 元帥。トルコ戦争の英雄。オーストリア援助のためにロシヤ軍總司令官に返り咲いたロシヤ人のひとつの典型。

バグラチオン 公爵。オーストリア派遣ロシヤ軍前線部隊司令官。

ベルク ドイツ系の世わたりのうまい近衛將校。

ドーロホフ アナトリー・クラーギンの友人で、素行のおさまらない青年將校。

カラタージェフ ピエールが補虜になったときの仲間のロシヤ兵。クトゥーゾフと並んで、ロシヤ人のひとつの典型といわれる。

アラクチェーイエフ 伯爵。ロシヤの陸軍大臣。

スペランスキー 成り上がり者の有力な政治家。

ラストープチン 伯爵。モスクワの總督で總司令官。

第三編

第一部

一

一八一一年の末から西ヨーロッパの武装強化と兵力集結がはじまり、何百万という人員がロシアの国境をめざして西から東へと移動したが、同じように一八一一年からロシアの兵力もその方面へ集結されていた。六月十二日、西ヨーロッパの軍隊はロシアの国境を越え、ここに戦争がはじまった。つまり人間の理性とあらゆる人間の本性に対する事態がはじまったのである。戦争に基づくありとあらゆる犯罪がここに行なわれることになったが、しかもそれを犯した人々は、これを犯罪とは思わなかったのである。

こうした異常な事件の原因はなんであつたか？ 歴史家たちは、オルデンブルク大公に加えられた侮辱、大陸封鎖令の不履行、ナポレオンの政権欲、皇帝アレクサンドルの強硬な態度、等々をこれらの事件の原因にあげること、素朴な確信をいだいている。

同時代の人々の目に事件がこのように映じたことは当然である。しかしこの事件の全貌を見きわ

(1) ナポレオンが公国の返還を拒否したことを、オルデンブルク大公は自分に対する侮辱であると考えた。(2) 一八〇六年、ナポレオンは英国の経済的屈服をはかり、英国とヨーロッパ諸国との通商を厳禁したが、ロシアは密貿易を行なった。

め、その意義をきわめようとしているわれわれ後世の人間にとっては、これだけでは十分であるとは思われない。われわれにはそれだけでは納得できないのである。大公が侮辱されたからといって、なぜ数千の人々がヨーロッパのもう一方の果てから襲来して、スモレンスク県やモスクワ県の住民を殺したり、あるいは逆に殺されたりしたのか、われわれとしては理解できない。

われわれのように曇りのない常識によって事件を見きわめようとしている後世の人間にとっては——その原因は無数にあると思われる。

もしもナポレオンが軍に進撃を命じなかったならば、戦争はなかったかもしれないし、すべての軍曹が再度の軍隊勤務を望まなかったとしても、やはり戦争は起こらなかったかもしれないのだ。要するに、事件の唯一の原因というものは一つもなく、事件は起こるべくして起こったに過ぎないのである。数百万の人間が人間らしい感情や理性を捨てて西から東へ進み、自分たちの仲間を殺さなければならなかったのは、ちょうどその数世紀前に、やはり人間どもの集団が仲間の人間を殺しながら、東から西へ進んだのとまったく同じことだったのである。

歴史にあつては不合理な現象を説明するためには、宿命論はどうしても避けられぬものである。人間は自分のためには意識的に生活するが、それが歴史的な、全人類的な目的達成のためとなると、無意識な道具の役を果たすことにもなる。

『王者の心は神の御手にゆだねられている』皇帝は——歴史の奴隸^{どれい}である。

歴史、つまり人類の無意識的、集团的、全体的生活は皇帝の生活のどの瞬間をも自分のため、自分の目的のための道具として利用するものなのである。

西欧の人間は互いに殺し合いをするために東へと移動した。

りんごは熟してくれば地面へ落ちる——だがりんごはなぜ落ちるのだろうか？ 地球の引力のためか、太陽にはされるためか、それとも下に立っている男の子がそれを食べたいと思うからだろうか？

そのどれもが原因ではない。それはいずれは自然発生的な事件が起こる際に見られる、諸条件の偶然の一致に過ぎないのである。歴史上の諸事件で偉人と言われている人々は、その事件のレッテルであり、すべてのレッテルと同様に、事件そのものとは、いちばん関係のうすいものである。

彼ら自身にとっては自分の意思のままと思われている偉人たちのどの行為も、歴史的な意味では、その意志によるものではなく、すべて歴史の歩みと関連を持つもので、この世のはじめからそのように定められているものなのだ。

二

五月二十九日、ナポレオンはドレスデン⁽¹⁾を出発した。

外交家たちは平和の可能性を固く信じて活動をつづけていたにもかかわらず、またナポレオン自身も、アレクサンドルを《わが兄弟なる陛下》と呼び、自分は戦争は望んでいないとその手紙の中

(1) ドイツ南東部の都市。

で断言していたにもかかわらず、西から東へ向かう軍隊の移動をせきたてる新しい命令を、つぎつぎに出すありさまであった。どの都市でも数千の市民が彼を歓迎した。

軍は西から東へと進み、彼の六頭立ての馬車も同じ方向へと彼を運んだ。

六月十日、彼はついに軍に追いつき、その翌日には早くも軍を追いつ越して、渡河点を視察するために、ポーランドの軍服に着替えてネマン河畔へ馬車を進めた。

その対岸に、かつてマケドニアのアレクサンドル大王が侵入したスキタイ王国(1)そっくりの帝国の首都《聖なるモスクワ》を中心とする見わたす限りの草原ステップを望み見ると、ナポレオンは戦略上、外交上の考慮を度外視して、あらゆる人々の意表をついて直ちに進撃を命じ、その翌日、彼の軍はネマン河の渡河を開始した。

十二日の早朝、彼は天幕を出て、ネマン河の三つの橋にみちあふれている味方の軍の流れを望遠鏡でながめていた。皇帝の出御しゅつぎょを知った兵士たちは、帽子を高く投げ上げて、口々に《皇帝万歳！》と叫んだ。兵士たちのどの顔にも待ちに待った遠征開始の喜びと、山上に立っているフロツク姿の皇帝に対する歓喜と忠誠の色があふれていた。

六月十三日、ナポレオンはヴィー斯拉河畔に馬を進め、河畔に駐屯ちゅうとんしていたポーランド槍騎兵の近くに馬をとめた。

ポーランド兵は列を乱して『万歳！』を叫んだ。浅瀬をさがして対岸へわたれという命令がくだされた。ポーランド槍騎兵隊の連隊長は、浅瀬などはさがさずに川を泳いでわたってはいけな

(1) 前七世紀ごろカスピ海岸に起こり、前六世紀に黒海北岸に王国をたてて栄えたペルシア系の遊牧民族。

ろうか、と副官にたずねた。陛下は不満には思われまい、と副官は答えた。老将校はそれを聞くが早いか、おれにつづけと命令して、いきなり馬をざんぶと川に乗り入れた。数百の槍騎兵がそれにつづいた。

彼らは半キロ先に浅瀬があつたのに、丸太に腰をかけて彼らなどには目もくれようとしない人間の目の前で、この川を泳ぎ、そして溺死^{できし}することを誇りに思っていたのである。

連隊長と数名の兵が川を泳ぎわたって、やつとのことで岸にはい上がり、《万歳！》を叫びながらナポレオンの立っていた場所をながめやったときには、その人の姿はもはやそこには見えなかった。しかしそれでも彼らは、自分たちは幸福であると感じていたのである。

その晩ナポレオンは、ロシアに持ち込むように準備された贋造紙幣^{がんぞう}を一刻も早くとどけるように、また手紙を押収^{おうれいゆう}されたためにフランス軍の配置を敵に知られてしまったサクソニヤ人を銃殺にしろという命令とともに、必要もないのに川に飛び込んだポーランドの槍騎兵連隊長を、ナポレオン直属の《名誉部隊》に編入せよという命令をくだした。

Quos vult perdere-dementat (神はそのほろぼさんとする人々を、狂気となす)。

三

一方、ロシア皇帝は閱兵や演習をしながら、すでに一か月以上もヴィルナで日を送っていた。戦争のための準備はなにひとつできていなかった。作戰計画もたてられていなかった。三つの軍団にはそれぞれ總司令官がいたが、全軍を統率する總司令官はなく、皇帝も進んでその地位を引き受け

ようとはしなかった。側近の人々の努力は、皇帝にできるだけ快適な時を過ごさせて、目前に迫った戦争を忘れさせることだけに向けられているように思われた。

六月にはいつてから、ポーランドの一侍従将官が、皇帝のために晩餐会ばんさんかいと舞踏会を開くことを思いついた。

もっとも皇帝に気に入られそうな貴婦人が舞踏会のホステスとして招かれた。ベニグセン伯爵は郊外の別荘をその祝宴のために提供しようと申し出た。

ナポレオンによって渡河命令がくだされ、その前衛部隊がコサツク軍を撃退してロシヤの国境を越えた日、皇帝アレクサンドルはこの舞踏会で楽しい一夜を過ごしていたのである。

夜の十二時になってもダンスはまだつづいていた。皇帝はダンスには加わらずに、戸口にたたずんでいた。

マズルカがはじまったころ、側近のひとりである侍従将官バラシエフが皇帝のそばへ歩み寄った。やがてバラシエフが口を開くやいなや、皇帝の顔に驚きの色が現われた。皇帝はバラシエフの手をとって歩き出した。

皇帝とバラシエフは嫉妬しつとに燃えているアラクチェーイエフには目もくれずに、庭へ出た。いまや大富豪としてはぶりをきかすようになったポリース・ドルベツコーイもこの舞踏会に出席していたが、それを見るとそっと庭のほうへ抜け出そうとした。だがバラシエフといっしょにテラスへ入ってくる皇帝の姿に気がついて、ふと立ちどまった。

皇帝はいかにも侮辱を受けた人のような興奮をあらわにして、ちやうどつぎのことばを言い終え

ようとしていた——

「宣戦の布告もなしにロシアに侵入するとは！ 敵の武装した兵士がたとえひとりでもわが領土内にいる限り、私は絶対に講和はしないぞ！」

「だれにも言つてはならぬぞ！」と皇帝は肩をひそめて付け加えた。ボリスは、それが自分に言われたことばであるとかかったので、目を閉じて軽く頭をさげた。

こうしてボリスは、フランス軍のネマン渡河の報知をいち早く耳にしたのである。そしてこのおかげで、他人には秘密にされてある多くの自分が知っていることを何人かの高官に示す機会をつかむことができた。

また同時にそれによってこれらの人物からさらに一段と高い評価を受ける機会をもつかんだわけであった。

フランス軍のネマン渡河という思いもかけぬ報知は、その場所が舞踏会の席でもあったので、とりわけ寝耳に水であった。

舞踏会から帰館すると、夜中の二時というのに皇帝は秘書官のミーシコフを呼びにやり、軍に対する命令と、元師サルトウイコフ公爵に宛てた詔勅^{しよくめく}の執筆を命じたが、その際その詔勅の中に、武装したフランス兵がたとえ一名でも領土内にいる限り、絶対に講和をする意志はないという、例の気に入りの一句を必ず入れるように要求した。

その翌日、ナポレオンに対する親書がしたためられた。